



TITLE:

静脩 Vol. 3 No. 1 (1966.4) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 3 No. 1 (1966.4) [全文]. 静脩 1966, 3(1)

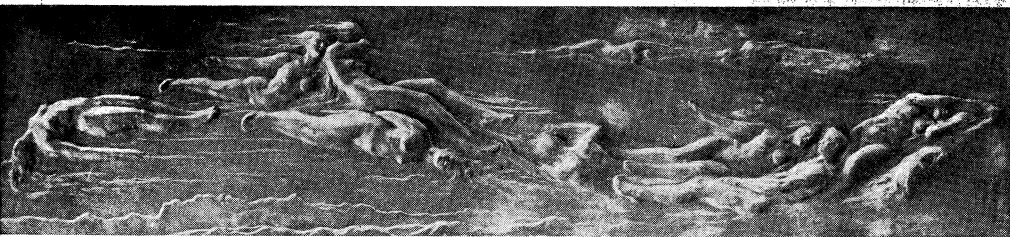
ISSUE DATE:

1966-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65912>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1966年 4月

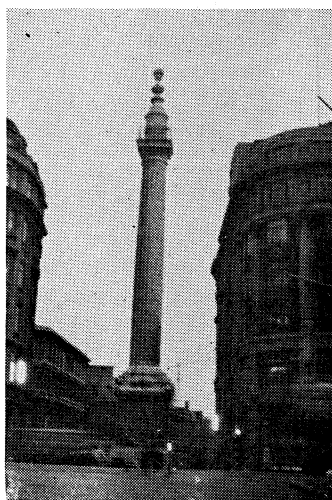
Vol. 3, No. 1

ロンドン・モニュメント

泉井久之助

いつもわたしは思うのだが、われわれは旅に出ても限られた日程のうちでは、本務のほかの用事を十分果すのは、なかなかむずかしいのであるまいか。わたしなどは、二度同じところを通る機会にめぐまれても、心にかかるそれらを、今度こそはと思いながら、十分に果せたことがない。

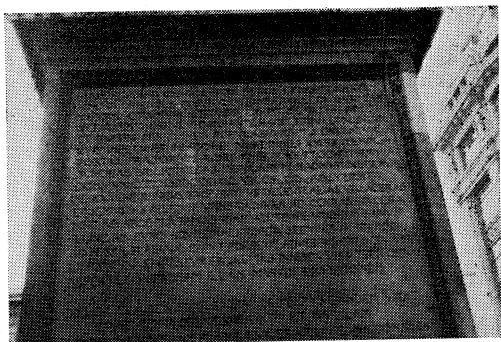
ロンドン・モニュメントの銘文は、以前から何となく、わたしにとって絶えず心にかかるものであった。しかし、そのラテン語がどうも少し変っているのである。ヨーロッパでは今日まで、公共の碑銘はラテン語で書かれたものが多い。しかしさすがにラテン系のイタリアやフランスのもの、特にそれぞれの首都で見出されるものは、大抵正しい古典期の格を踏んで簡潔明晰に、品よく文章がまとまっている。ところがイギリスでは、どうもそうではないものに時々出あうことがある。ロンドン・モニュメントもそうしたものの一つだが、わたしはかねがねこれを写真でなく、直接に碑面から読んで見たいと思っていた。しかし八年前の第一回はもう日の暮、第二回は昨年一月の出発の日の明け方—といっても冬のロンドンでは七時すぎ—で、同じように碑の面はよく見えなかった。



モニュメントは周知のように、1666年の有名なロンドン大火の記念碑である。この都会ではその前年から疫病の大流行があり一時は日に7000人、年末までに併せて68,000人の犠牲者があって、しかも流行は1666年に入っても熄まなかった。大火はこうしたなかに起ったのである。

その頃ロンドンは全く中世の町であった。家はみな木造、道は狭く車は通れず、大きい運送はすべてテムズの水路に頼っていた。碑文はラテン語でこのように書き起している。「1666年九月二日 (DIE IV NONAS SEPTEMBRES), ここから東の方、この碑の高さに等しい 220 フィートの個処より夜半不意に火が出て、風に煽られるまま、遠くまで焼きつくした」。

この記念碑はロンドン橋北詰の魚町 (Fish St.) に立っている。その名の通りこの界限は今も毎日明け方、魚の陸揚げと取引で大騒ぎである。そこから 220 呎東といえば、今も昔の名が残るプディング小路 (Pudding Lane) である。これらの町名が示すように、ロンドン橋の北詰は食料品の中心的市场であった。火はプディング小路で王室に納めるパ



ンも焼いていたジョンの家から出た。火は忽ち「盛な勢で四方にひろがり、信じ難いほどの轟音をあげつつ寺院の89をはじめ、市の門、市庁舎（つまりギルド・ホール）、公会所、慈善院、学校、図書館、ならびに無数の街区を焼き払い、損害は民家13,200、街路の400に及んだ。市区26のうち15は根本的に破壊せられ、8つは半焼けとなって荒廃した」。

風は北東より吹き風下にあたるロンドン橋—これはテムズに架る当時唯一つ

の橋であった一も、朝の8時には橋上にあった家並に火がついた。夕方には Canon St. を焼き、三日目にはセント・ポール寺院さえ火の手を受けた。市庁舎も焼け、今も地名に残るテンプル僧団の大きい本拠も焼かれ、火は当時の監獄であったフリート街の堀の源に伸びて、市の廃墟は436 エーカーに上った。「未曾有の炎上」はこうして「花と栄える都を瞬時にして無に帰しつつ」、四日目、ようやく下火になったのである。

碑の文章はなおずっと続くけれども、この文章はいかにも読みづらい。それは古典期のラテン語の格を保とうとしながら、句の立て方にも意味の運び方にも古格のリズムがないからである。いやそればかりではない。さきの九月二日という日付も半ば古典的な書き方であるが、正格の古典語では決してあの書き方はしない。フリート街に火が「伸びた」というところも、はじめ PERREXIT と彫って、あとで第一の E に重ねて O を彫りなおさせている。porrexit を perrexit とするのは、誰でもよくやる誤だが、後者の形もずっと上代では全くなくはないのだから、強いて E に重ねて O と彫る不様をさらす必要もなかったのである。

ことばの上から何かと心にかかる碑文であったが、今度ばかりは正午の出発を控えて、便利の大英博物館の図書室で調べなおすいとまもなかった。（文学部教授）

附属図書館報告書を総長に提出

本館では、京都大学における図書行政のあり方について広く全学的見地から根本的な検討を加えていくため、39年11月から京都大学附属図書館改善特別委員会を設置した。この委員会の審議経過については、本誌上にその都度報告されたが、この委員会で開陳された多くの貴重な意見をふまえ、このたび附属図書館の実情とそれが改善されるべき目標ないし構想を具体的に掲げ、今後の図書行政を推進していくため、堀江館長から総長あてに「京都大学附属図書館報告書」が提出された。

報告書はB5版30頁余の小冊子であるが、京都大学附属図書館の今後のあるべき姿が明確に打出されたものとして注目をあつめている。ここに打出された構想の実現には多くの困難があると思われるが、その実現は京都大学における研究・教育の推進のための不可欠の条件である。ひろくご精読いただくよう期待している。

電子複写（Xerox）業務の開始

かねてより一般の要望のあった電子複写業務は4月1日より業務を開始した。機械の性質上湿気を嫌う関係から地下室には置けないので、新聞閲覧室を改造してその作業室とした。いうまでもなく文献複写は迅速を貴ぶものであるから、できれば待っている間に即座に複製ができれば最も理想的である。数年以前から日本に輸入されている Xerox 914型はこの理想にかなうものであって、すでに本館でも事務用文書やカードの複写には一昨年より利用していたが、今回2台を設置して一般の需要にも応じようとするものである。

申込受付は新しくできた電子複写室で行ない、持参の資料は、量の少いときは即座に複写して渡すことができる。料金はB4版1枚30円となっている。

尚、マイクロ複写の受付は従来通り地下の文献複写室で行なっている。

図書館を斜めに見る

守 川 正 道

大学に入って6年になる。入学していい図書館に入ったのはごく数える程の回数でしかない。あの巨大な暗い建物、それは、恐ろしく人を圧迫する。京都帝国大学図書館の歴史がのしかかってくるようで、耐えられないのである。本は好きなのでよく読む方だと自負しているのだが、図書館になじめないのは何故だろう。官僚的と思いつけているからそう見える制服を着た係りの人が、こわいのだろうか。だが実際、親切な人がほとんどなのだからこれは図書館の敷居が高いという原因ではなさそうだ。カードをめくって図書借り出しを依頼するということのめんどくささであろうか。かなり根拠はあるが、これもいたしかたない手続の一つであろう。では、あの大きな部屋の中で、(全くこの天井の高さといったらずいぶん無駄な建物だと思うが、同時に妙な圧迫感もあるから不思議だ)大きな机を前にして、女性でも前に座ってはくれないかと半分期待しつつ、実際は、自分と同じようなオノコが座って、幻滅する、ということであろうか。だがこういう気分ของときは、もはやすでに勉強をしようという段階ではあるまい。本当に読むことに専心しているときは、まわりはそう気にはならないはずだから、あれこれ考えてみて次のようなことに思い至った。元来図書館の用法、といっても、現代に生きる者の使用するがわからなかった用法だが、これには二つあると思う。一つは、図書館の蔵書を借りて読むということ。ただしこれはあくまでも、借りるという点に力点がおかれる、なぜな

ら借りた以上、研究室で読もうが自宅で読もうが文句をいわれる筋はないから。もう一つは図書館とい場所を利用して本を読むということである。もっとも図書館で待ちあわせをすることもあるが、ここではやはり、図書館の机を使って読書するということにしたい。この後者の利用者が現在の我々のまわりでは圧倒的に多いといえるのではなかろうか。試験期になると百貨店の特売場みたいになるのはその典型である。かくて現代は図書館の利用者は、図書の利用ではなく、館＝場所の利用者が圧倒的といえると思う。

かく考えたとき、おのれの図書館を敬遠する原因がわかった。

前者の用法つまり図書の利用という点に関しては、本というものは題名だけでは内容がほとんどつかめないということからくる。我々はまだまだナマの資料(だれその日記とか公文書など)を使うには力よく、いわゆる解説書の類になる。その内容がわからず借りて読んでみるというノンキさ(というよりもこれぐらいにならねばならぬのかもしれないが)を持ちあわせていないのである。かくてopen式の学科閲覧室やA.C.C.へ、そして古本屋へと足がむく。後者の用法、場所の用法は、あまりに人の出入りがひんばんであることから落ちつけない、同時に賢そうな顔付きにあてられて退場ということになってしまう。

かくて今でも汚い下宿で本をめくるのである。

(文学部西洋史学科)

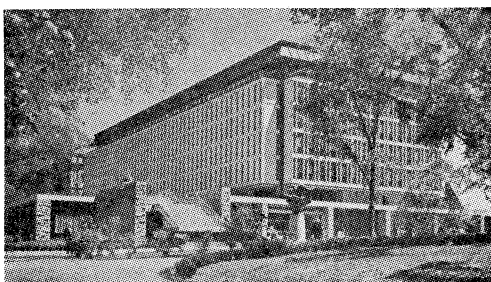
CORNELL 大学の図書館を利用して

森 本 尙 武

ニューヨーク市とナイヤガラ滝との間に横たわる幾つかの氷河湖 Finger Lakes のひとつ Cayuga 湖の南端に位置する人口3万の小都市が Ithaca である。Cornell 大学は Ithaca 市を見下す台地にあり、州立と私立の14学部のものから成っている。授業料は学部によって異なるが、講義や利用施設についての差別はいっさいない。図書館は日本と同じく総合図書館2つ、準総合図書館1つをもち、それらの出先機関として各学部それぞれ図書室をもっている。総合図書館はそれぞれ OLIN, URIS Library, 準総合図書館は MANN Library と呼ばれ、それぞれ創設者の名前をとった、立派な7~8階建のビルである。このうち URIS は学部学生用として基礎的な図書を、MANN は農学部と家政学部の College Library で、自然科学系の図書のみを収容している。

毎年の予算も多く、このうちの多くが人件費に使えるのもうらやましい限りである。管理専門事務員の他に part time の学生アルバイトがあたり、何人も交代で適所に配置され、返却図書の整備にあたっていた。このほか図書館利用上の一さいの相談役もあり、実に機能的に動いていたと思う。

利用度の高い図書は同じものが何冊も備えられ、何時でも利用できるようになっている。しかし、貸出期限が切れると、理由のいかんにかかわらず罰金が課せられ長びくほどその額は高くなるので、利用者もうかうかできない。この罰金は学生アルバイト代等に使われるが、利用者も必要な時には罰金承知でやって来るので、自然に同じ本が何冊も準備されることになるのであろう。この罰金も年間額がほとんど一定で相



当の額になるらしく、学生アルバイトも必要な時には多人数補える仕組みになっている。

図書も非常に美しく保管され、線をひいたり落書したものは一度も見受けたことはなく、図書は自分のものであると同時に他人のものであるとの意識がはっきりして、実に気持がよかった。閲覧室も比較的小さい室がいくつもあって、落ち着いて勉強できるようになっている。室内では勿論、喫煙、雑談は禁物で、首をあげてよそ見する者すらない。こういった雰囲気の中で勉学に励むことこそ学生本来の姿であると痛感した。開館時間は 8.00AM~11.30PM で、家で勉強するよりも、その雰囲気にとけ込んでやった方が能率的であるから、いきおい図書館も満員の盛況である。この他図書館の出口に私物検査所があり、禁帯出図書など図書の万一の紛失、盗難を防いでいたのも印象的であった。

以上簡単に気のつくままを書いてみたが、一口に言って、いつでも気軽に利用し、よく勉強できる場であるように、常に運営委員会が動き、積極的に利用者の不満、希望を検討し改善して行こうとする気運があり、また利用者も、常に公共の場、および物であることを自覚し、非常によい勉学の間であった。

(農学部助手)

プリンストン大学出版部新着寄託図書

アメリカ大学出版部協会の日本における寄託図書館として本館が指定されてから、やがて1年半になろうとしている。その間、プリンストン、テキサス両大学出版部からおよそ60点の学術図書が寄託され、学者や学生の研究の資料として供された。このたび、ご紹介するものはプリンストン大学出版部から第2回の配本として寄託された24点の学術新刊図書である。

- Barnet, Richard J. & Falk, Richard A., ed.: Security in disarmament. 1965.
 Barzanti, Sergio: The underdeveloped areas within the common market. 1965.
 Blair, John G.: The poetic art of W. H. Auden. 1965.
 Brown, Robert Craig: Canada's national policy 1883~1900: A study in Canadian-American relations. 1964.
 Cairns, Stewart S., ed.: Differential and combinatorial topology: A symposium in honor of Marston Morse. 1965.
 Coleman, James S., ed.: Education and political development. 1965.
 Cowing, Cedric B.: Populists, plungers, and progressives: A social history of stock and commodity speculation 1890~1936. 1965.
 Fussell, Edwin: Frontier: American literature and the American West. 1965.
 Hammond, Thomas T., ed.: Soviet foreign relations and world communism: A selected, annotated bibliography of 7,000 books in 30 languages. 1965.
 Jackson, Gabriel: The Spanish Republic and the Civil War 1931~1939. 1965.
 Jansen, Marius B., ed.: Changing Japanese attitudes toward modernization. 1965.
 Kauder, Emil: A history of marginal utility theory. 1965.
 Kolko, Gabriel: Railroads and regulation 1877~1916. 1965.
 Macdonald, Robert W.: The League of Arab States: A study in the dynamics of regional organization. 1965.
 Mitchell, Allan: Revolution in Bavaria 1918~1919: The Eisners Regime and the Soviet Republic. 1965.
 Orenstein, Henry: Gaon: Conflict and cohesion in an Indian village. 1965.
 Ploss, Sidney I.: Conflict and decision-making in Soviet Russia: A case study of agricultural policy 1953~1963. 1965.
 Preminger, Alex, ed.: Encyclopedia of poetry and poetics. 1965.
 Pye, Lucian W. & Verba, Sidney, ed.: Political culture and political development. 1965.
 Rosenberg, Morris: Society and the adolescent self-image. 1965.
 Rothkrug, Lionel: Opposition to Louis XIV: The political and social origins of the French enlightenment. 1965.
 Wellek, René: Confrontations: Studies in the intellectual and literary relations between Germany, England, and the United States during the nineteenth century. 1965.
 Young, Crawford: Politics in the Congo: Decolonization and independence. 1965.
 Ziolkowski, Theodore: The novels of Hermann Hesse: A study in theme and structure. 1965.

維新資料展開催 —新入生を歓迎して—

4月11日より14日までの4日間。本館陳列室において、新入生歓迎の気持ちをこめて維新資料展を開催した。今回はわが国に近代の黎明をもたらした明治維新から約100年を経ようとする今日、その一大変革を推しすすめた青年志士達の残した筆跡、遺品などを中心に展観に供した。連日新入生を含めて若い鑑賞者で賑い、盛況裡に終わった。

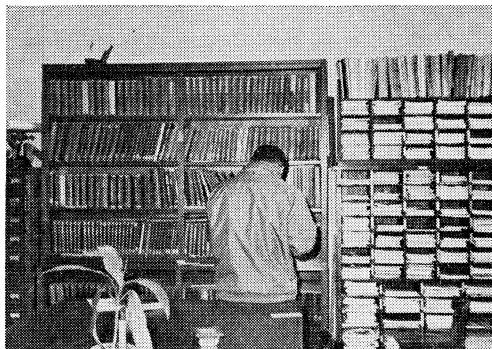


理学部・教室図書室 (1)

理学部は工学部と同じく特殊な状態に置かれている。それは理学部総合図書室がなく、9教室独自に図書室が存在し、それぞれに業務を行なっている点である。二、三の教室をのぞいては各1名の図書職員がいるが、実際図書職員として認められているのは理学部全体で1名だけであるにもかかわらず、休暇をとって司書講習を受けに行くことさえ困難な状態に置かれている。このように人員の不足は他学部と同じく深刻でその1名で、購入・受入・供用・複写・論文タイプと引き受けているような状態で、昨今いわれている近代化とは全く縁遠いように思われる。また書庫不足の悩みも各教室がかかえている問題である。

今回はこのような理学部の中での特徴的な数学教室と地鉦教室の図書室を紹介しよう。

数学教室 は歴史も古く明治30年の創設で、蔵書数も群をぬいて多く、現在約5万冊、年間購入費900万円以上、人員5名(教室事務と兼務)で、実験講座をもたず図書が生命の教室ですから整理の行き届いていることは理学部第一、靴を脱いでスリッパで書庫へ入るといっては大学広しといえどもこの教室だけではないでしょうか。2、3年前までは開架式でもなく、厳格な教官がデンと居られ、外部のものは利用しにくかったという風評もあったが、近頃は女性ばかりのなごやかな雰囲気、複写用には貸出しもできるようになり、利用者もグンと増加したようである。理学部を訪ねられ



地鉦教室 図書室

る時には是非一度数学教室の図書を閲覧されると参考になるでしょう。

地鉦教室 は大正11年の創設で、創設当時毎年3万円づつの図書を購入している記録があります。丁度ドイツの不況時代で本が安く買えたこともあります。1600年代ニュートンの論文の出ている Philosophical Transaction of the Royal Society of London もその頃に購入されたもので全くの貴重図書です。10円あれば親子4人充分に暮らしてゆけた時代の3万円はとにかく大した金額であつたらうと想像される。現在蔵書数約3万冊、年間予算160万～200万円、地質学の専門書を揃えている点では日本一といわれる下地が既に創設当時にあったものと思われる。文献複写の依頼も多く、本館の複写室に往復する本も年間100冊を下らない。

ここの人手不足は多分に洩れずたった1人で日常の雑用に追われ、コンテンツサービスや毎日のように送られてくる外国からの別刷整理まではなかなか手が回らず、山積みされた本をみては頭の痛い状態である。

将来医学部のような総合図書館ができ、本館とは1本の線につながり、教室の図書業務が緩和されればいつも考えさせられる。

あとがき

新しく京大の門をくぐられた新入生諸君に心からお祝いの言葉をおくります。おめでとう！今日から図書館は諸君のものです。これからの4年間、図書館は諸君のよき勉学、研究、読書の場として自由存分に利用、活用して下さい。利用上わからないこと、希望、意見があれば気

軽に係員に申しでて下さい。私達はできる限り諸君の期待にそえるよう努力します。

本号は諸般の事情から発行が遅れ、卒業していかれた人達の手には渡らなかったことを申しわけなく思っています。次号以降編集スタッフも新たによりよきものと一同張りきっています。ご期待下さい。